

浦高の40年前と今、校長として!

●浦高第30代校長・小島先生のスピーチ・前半



昨夜の会員スピーチは埼玉県立浦和高等学校第30代校長・小島克也先生の「同窓校長として想うこと」でした。要点筆記でご紹介させていただきます。

◇ ◇

■同窓校長として想うこと

皆さん、こんにちは。浦高第30代校長の小島です。私は浦高30回卒業でOB校長として昨年4月から母校にやってきました。本日は「同窓校長として想うこと」というタイトルで現在の浦高に想うことをお話させていただきます。

◆弓道部、全国優勝(8月)

その前に、直近の話題から1つお話させていただきます。同窓会本部からの資料にもございますが、8月18日に開催されました全国高校遠の大会(紫灘旗)において見事に優勝いたしました。遠的(えんてき)というのは、60m離れた的に矢を射る競技で全国優勝は弓道部にとって初めてのことでした。他にも部活の話はいろいろありますが、レジュメに沿ってお話をさせていただきます。

◆浦高の40年前と今

私が浦高で学んだのが約40年前、そして昨年4月から浦高に赴任した訳ですが、変わっていないなあと思う部分と変わった部分がございます。

◆変わらぬ強さ

最初に「変わらぬ強さ」として挙げられるのは、「尚文昌武」です。「尚文昌武」は文武両道ということで、勉強とスポーツに頑張る生徒たちの姿です。勉強の文に関して進学実績を見ていただければ変わらないことがお分かりいただくと想いますが、教職員の生徒への指導は大いに変わりました。この点は後ほどお話させていただきます。

ここで申し上げたいのは「スポーツへの力」です。4月の新入生歓迎マラソン、7月の臨海学校、11月の古河強歩大会と60年以上の伝統行事がありますが、高校の学習指導要領で体育は3年間で7~8単位とされているのですが、浦高では9単位となっています。1単位とは、毎週1時間の授業を1年間通じて行うことで履修とされるものですが、週5日制になって進学校では国語や数学などの教科に力を入れたいと考える学校が多い中で、浦高は1単位多く組み込んでいます。

それは最近のことではなく、40年前に私が浦高で学んでいた時は学習指導要領で7~9単位とされていたところが11単位となっていました。

これは変わらぬ「昌武」の精神であり、心身を錬磨することに役立っているのだらうと思います。

◆進化する強さ

「尚文昌武」が変わらぬ強さだとすると、変わった部分もあります。私はこれを「進化する強さ」と言いたいと思います。それは「浦高は、教育の王道を歩きながら進化する学校」だということです。

① グローバル人材の育成への取組

グローバル人材の育成というのは全国的な課題でもあるのですが、毎年40名以上の生徒が海外に行っています。また2年間の長期派遣で、留学先の高校の卒業資格が取れるという制度がある公立学校というのは全国的にも珍しいと思います。その発端は創立100周年でのウィットギフト校(イギリスのパブリックスクール)との姉妹校提携です。



〔ウィットギフト校、同校HPより引用〕

春休みと夏休みの10日間程度の短期派遣、2年間に及び長期派遣とあるのですが、毎年1名が長期派遣となり、イギリスでの卒業資格も取得してケンブリッジ大学やオックスフォード大学などイギリスの大学に進学する生徒もおります。今年の春に卒業した生徒は、ウィットギフトを首席で卒業しケンブリッジ大学に進学しました。ウィットギフトからケンブリッジへは3人しか進学していないので、如何に優秀な成績だったかが窺われます。

こうしたグローバル人材の育成がこれからの浦高の強みになると考えております。

② 集団力の向上

絆や協働の時代の中で、仲間を大切にする生徒が増えています。私たちの時代にも仲間を大切にしていなかったかと言うとそうではありませんが、先生方もユニークで個性的な方が多く、生徒も個々が勉強に取り組んでいたのですが、今は教員も生徒も一緒になって学習に取り組んでいます。

その一つが組織的な学習です。かつては個々の先生方によって教科指導の内容がそれぞれでしたが、今は教科で統一した指導方法、浦高独自の教材や問題が用意されています。

二つ目が受験“共走”です。かつてはそれぞれが独自に勉強していましたが、今は朝7時半から各クラス10~20名の生徒が自習に来ており、夕方も部活を終えた生徒たちが6時から9時まで自習するという姿が普通です。教員も併走しており、「受験競争」ではなく「受験共走」と呼んでいます。教員による面談も年間5回っており、メンタル面でもサポートをしています。

こうした集団力の向上の裏側には、個の弱体があります。中学校のトップは私立の一貫校へ行ったり、男子校が嫌だという理由で県内の共学校へ行ったりするケースも聞いています。また、浦高の伝統である新入生歓迎マラソンや古河マラの宣伝が強すぎるのか、運動が苦手だと敬遠されてしまうケースもあり、宣伝が逆効果になっていることもあります。

現在の生徒の多くが依頼心が強くなっており、集団で伸ばしていかなければならないという背景がありますが、「集団力の向上」は現実に沿った対応であり進化だと前向きに捉えています。

③ 同窓会の支援拡大

浦高創立 100 周年をきっかけに同窓会の皆様からさまざまな形で支援をいただいております。

一つは 100 周年記念事業としての「ウィットギフト姉妹校提携」であり、それを支えてくれている「同窓会奨学財団」です。これらの支援によりグローバル人材の育成を進めることができます。

また、19 年前から続いている「麗和セミナー」です。さまざまな分野で活躍されていらっしゃる OB の方々のお話を直接伺うことで自分たちの進路を考える時の大きな参考になっています。

こうした目に見える支援が浦高にとっては大変心強いものになっています。

◆校長としての 4 つの姿勢（信念）

私は校長になってから次の 4 つを基本姿勢、信念としてやってまいりました。

① すべての判断の基点を「生徒の能力の向上」に置く

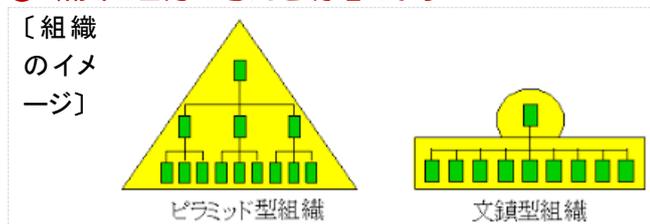
教員から相談を受けたり、生徒から相談を受けたときに、それは生徒のためになることなのか、教員のためだけになることではないのかというようなことを考え、すべての判断を「生徒の能力の向上」という基準で考えるようにしています。

② 生徒の声を学校経営に反映する

具体的な方向を考える時には現場に出ることを基本としていますが、昨年 4 月に赴任して来た時に「3 年生全員と面談する」と公言してしまいました。実際、浦高の校長は非常に忙しくて時間を調整することは大変だったのですが、昨年は 400 人の生徒たちと面談することができ、今年も 200 人との面談が終わりました。

こうして生徒たちと面談しているとさまざまな課題が分かってきます。そうした生徒たちからの声を学校経営の中で生かしています。具体的な事は後ほどお話いたします。

③ 職員に自分の考えを明確に示す



社会や一般的な企業ではピラミッド型組織が多いのですが、学校は校長と教頭がいて教職員がフラットな形で横に並び文鎮型組織になっています。ピラミッド型組織であれば上下下達で進むかも知れませんが、文鎮型組織では一人一人とコミュニケーションをとって丁寧に対応していかなければなりません。

先生方を不安にさせないために校長としての方針・考えを明確にすることに努めています。

④ 有言実行を旨とする

これは教員になった時からなのですが、まずは「やります」と宣言するのです。そして、その後は必死でできるまでやり続けるのです。生徒との面談も浦高の校長の忙しさを知らずに宣言してしまったことなのですが、言った以上はやり抜くしかないというやり続けました。

生徒には「無理難題に挑戦せよ」と言っている以上、校長も自らチャレンジしていかなければなりませんね。

◆課題解決への具体的な一手

ここでは部活動について、生徒との面談で分かった課題を解決するためにとった「部活動方針」についてお話しします。

■部活動の活動方針

【基本的な理念】

生徒に心と体の余裕を与えることのできる部活動を目指す

【具体的な方針】

全体の強制練習は、週 5 日以内とし、最低 2 日は、一人一人の自由な時間として保証する

というものです。

これは 3 年生との面談の中から課題として浮かび上がったことなのですが、「勉強も部活動も好きなのですが、授業の課題、部活動の時間が強烈で辛い。中学時代は自分の好きな分野の本を読む時間があったのだけれども、今はその余裕がない」という意見でした。授業の課題は大切だし、部活動も一生懸命に取り組んで上を目指してくれる姿は大切けれども、余裕のない忙しさって何だろうかと考えました。

生徒たちにタイムマネジメントを学ぶことの大切さをどう伝えようか、授業と部活をやり続けながらも、人間としての幅を広げる読書や趣味をする時間を作ることができないかと考えた結果たどり着いた結論が部活動の強制練習 5 日制でした。

春日部地区浦高会の活動の中で名前の出てきたピアニストの追川礼章君は、元々陸上部で古河マラでは 10 位以内に入る選手でした。そんな彼は、部活の陸上を頑張りながらも、大好きな音楽も続けて藝大に入り、現在はプロのピアニストとして活躍しています。元々陸上部の強制練習は週 5 日制だったそうです。そこで、彼は自由な 2 日間をピアノの猛練習に励んだようです。【次号に続く】